

## オディヴィア夫人

### I

ノルウェーに一人の女性がいました、  
愛らしい大富豪の娘、  
口々に称えられ噂されていました、  
美しい色白の乙女と。

誇り高い男たちがはるばる西から東から  
船で海を越えてくる者も、  
だれもがその娘を花嫁にしようと—  
でも娘にその気はないのです。 5

娘は男たちに故郷へ帰り  
長旅で擦り切れた衣服を繕いなさい、  
そして愚か者、ろくでなしと呼び、  
眉をひそめて彼らを驚かせました。 10

ところがここに手ごわい男が一人いました  
その名はオディヴィア—  
武力を頼み、詩歌を愛で、  
何よりも若い娘が好きなのでした。 15

このオディヴィアが膝を折り  
命に掛けて誓ったのです、  
それもキリストでなくオーディン神<sup>1</sup>に  
この美しい乙女を妻にすると。 20

オディヴィアは娘に言い寄り、結婚し、  
二人は幸福そのもの—  
夫はいつでもどこでも鼻高々  
オーディン神に誓って妻を手に入れたと。

そのオディヴィアは大邸宅に妻をひとり残し、  
ああ それはなんと悲しい別れの日—  
聖なる地<sup>2</sup>に向け旅立ちました  
異教徒の輩<sup>3</sup>を退治するために。 25

オディヴィアは聖地からの帰途  
しばしビザンティウム<sup>3</sup>に留まり、  
宴と諍いに明け暮れました  
美女たちの虜<sup>4</sup>になったのです。 30

<sup>1</sup> Him that hang on tree = Not Christ, but Odin. オーディンはオークニーではケルト神 Lugh を指す。

<sup>2</sup> Guthaland= The Holy Land (literally, God's Land)

<sup>3</sup> Muckle Gerth= Byzantium: The old Norse name of Constantinople

ビザンティウムでは長逗留—  
邪悪の目<sup>4</sup>がそこに留まれと！  
そのあいだ美しい妻は侍女たちに囲まれ  
目に涙をたたえ悲嘆の日々を過ごしたのです。 35

夫人はいつも華やかに着飾り、  
金色に輝く髪を櫛で整え、  
そして城壁の向こうを見渡すのです  
愛する夫が帰ってこないかと。 40

夫人は目を凝らして待ち続け  
侘しい毎日がいつしか一年に—  
しかしオディヴィアは、帰らず、  
愛する夫の消息も分からなかったのです。

## II

夕闇迫るある夕暮れどき 45  
一人の堂々たる騎士がやってきました。  
力いっぱい門を叩き  
大声を張り上げました。

「お願い申す、お願い申す！門番よ、  
今宵こちらの館<sup>やかた</sup>に泊めてください。  
道中は長く、陽は沈み、  
私の住まいははるか彼方。」 50

「ならぬ、ならぬ、とつと失せろ！」  
ここにお前の寝場所なぞないわ。  
よそ者は誰もこの館<sup>やかた</sup>に泊まれない  
領主は海の向こうに遠征中である。」 55

「大事なことを伝えにきたのが分からぬなら、  
美しい女主人に伝えてください  
聖地から来たと  
オディヴィアの消息を伝えるために。」 60

その言葉で門が開き、  
騎士はずかずかと館に入って行きました。  
すると周りの侍女たちは口々に言いました  
これほど凛々しい騎士に会ったことがないと。

騎士は絹の帽子を取って 65  
膝をつき  
夫人の膝に金の指輪を置きました  
それをひと目見て夫人の顔はほころびました。

「愛するご亭主からのしるしを  
お渡しします、美しいお方、 70  
私が去る時、ご亭主は上機嫌。  
今では、オディヴィア卿です。

ご亭主は騎士の称号を上手く手に入れました。

---

<sup>4</sup> Black sight = The evil eye: a malediction which still survives

多くの屈強な兵たちを殺し、  
多くの異教徒を威嚇したのです、  
恐ろしく鋭い刀剣で容赦なく。」 75

夫人は金の指輪を目にして  
騎士が語る話にもそぞろ  
目をスカーフでおおい、  
顔の血の気も失せました。 80

でも次には愛らしい顔がぱっと明るく  
愛らしい目が喜々と瞬きました。  
「さあ、お立ちください、勇敢なお方  
よい報せを持って来てくださいました。」

「<sup>やかた</sup>館の盛大な<sup>うたげ</sup>宴で、  
血のように赤い極上のワインと、  
たっぷり飛び切りのご馳走を  
この勇ましい騎士にご馳走しましょう。」 85

その夜騎士の話は尽きなかったのです  
美しい女性のために争った数々の戦い  
あの聖地でのお偉い騎士  
オディヴィア卿の洗いざらいの話で。 90

騎士は常にほのめかすものの、明言せず、  
どの話も絶えず遠回しに、  
オディヴィアはこまめな伊達男  
至る所で女たちを待らしている。 95

<sup>うたげ</sup>宴が終わりに近づくと  
召使たちは皆引き下がり  
残ったのは二人だけ  
そのとき夫人は訪問者に言ったのです— 100

「なぜあの金の指輪を返しにいらしたの？  
私につらい悲しみと苦痛をもたらすものを、  
あなたを熱く愛していた  
幸せな日々を思い出させるものを」

「お分かりでしょう、奥様、愛しい人よ、  
はるか昔あなたはあの指輪をくださった、  
そして輝く月光のもとでこの指輪に  
あなたは永遠に私のものになると誓われた。」 105

「それ以来私は悲しみに沈み、  
<sup>おか</sup>陸でも海でも孤独な男、  
私の妻にあなた以外の<sup>ひと</sup>女性を  
思い描いたことはない。」 110

「さあさあ、お静かに、嘘がお上手な方、  
あなたの言葉に心がひどく痛みます。  
私たちの仲を切り裂いたのはよくご存知  
—不吉なオーディンの誓い。」 115

騎士はおもむろに夫人の白い手を取り、  
夫人の心と、騎士の心は通じ合い。  
次に何が起こったか、お分かりでしょう—  
いえ 申し上げることは控えましょう。 120

騎士は夜明け前に立ち去りました、  
送別の宴はいらぬと命じ。  
何があったかは誰も知りませんが—  
やがて夫人は小さな喜びに包まれました。

夫人の美しい瞳から輝きが消え、 125  
赤みを帯びた色白の肌は青白くなり、  
夫人は日ごと夜を願って  
過ぎゆく時を待ちました。

### Ⅲ

やがて子守唄が聞こえてきました、 130  
夫人がわが子をあやししながら、一心に、  
口ずさむ<sup>うた</sup>歌詞が  
心に深く響きます。

「ねむれ、ねむれ、愛し児よ、  
さあさお眠り、ぐっすりと、  
おやすみよ、私の小さなかわいい宝もの！ 135  
おまえに母の悲しみは分からない。

「ああ！父親は誰かしら。  
ああ、ああ！なんと恐ろしい罪を！  
わが子の父親も知らず 140  
住んでいる場所も知らないなんて。

「ああ、ああ！私は言われるでしょう  
ふしだらな女と口々に、  
私が、人妻が、産んだのと  
知らない男の子供を。」

そのとき薄気味悪い姿が話しかけたのです 145  
ベッドの足元にぬっと立ち現れ、  
「ここにいるよ、赤ん坊の父親が、  
そなたの<sup>いと</sup>愛しい夫ではないけれど。」

「あなたこそこの子の父親、  
でももう甘い恋心なぞ抱きません、 150  
私にはとても、よい夫がいます  
今は遠く離れています。」

「お前の結婚した男なぞどうでもよい、  
その男の顔なぞ見たくもない、  
だが六か月経つと 155  
私は保育料を払いに来るつもり。

「わずかばかりの財産を  
私のせいで失ったと言われたくないからだ、  
次に来るときに、おまえは費用を受け取り

- 子どもは私が受取り 跡継ぎにする。」 160
- 「こたび、あなたへの愛ゆえに子を産みました、  
大きな過ちをもたらした愛、  
さああなたの住まいと、  
本当の名前を教えてくださいな？」
- 「サン・イムラヴォが私の名、 165  
陸で歩くことも海で泳ぐことも自由自在、  
私はセルキー族<sup>5</sup>の  
最高位の王である。
- 「陸では人間、 170  
海ではセルキー、  
わが家はスール・スケリー<sup>6</sup>にあり  
すべてが私の支配下にある。
- 「千を超えるセルキー族は 175  
喜んで私に仕え、  
私が一族すべての王であり  
私の話すことが法律になる。」
- 「どのように赤ん坊を連れてゆき、  
どのようにその幼子<sup>おさなご</sup>を守るの？  
冷たい家で 恐ろしい海を  
わが子の墓場にするだけでしょうに。」 180
- 「幼いわが子は大事に運ぶ、  
船など何もないが、  
注意深くスール・スケリーへ  
太陽が高く昇るまでに。」
- 「どのように息子を見分け、 185  
どうすればわが子と分かるの？」  
「スール・スケリーのすべてのセルキー族の中で  
息子はその首長になる。
- 「息子のひれは煤のように黒く、  
身体<sup>からだ</sup>は吹き溜まりの雪のように白くなる、 190  
そして私は息子に寄り添う、はるか昔  
お前にしたように。」
- 「わが夫は誇り高き戦士  
世に名だたる闘士、 195  
殴ったり突いたりするかもしれません  
息子が海のセルキーでいると。」
- 「それは心配ない、だが怖いのは

<sup>5</sup> Selkie folk アザラシ人間: 人間に変身する力を持つ大アザラシ (ケルト世界の伝承)

<sup>6</sup> Soolis-Skerry オークニーメインランド北西に位置するアザラシが集う海に囲まれた岩礁

雄鷄おんどりが鳴いて 私がここで見つかること、  
しかし何が起ころうと、半年すると  
息子を迎えに来る。 200

「そのとき息子は七か月、  
私は再び人間になり、  
可愛い幼子おさなごを連れて  
スール・スケリーの海に戻る。」

やがて六か月が過ぎ 205  
サン・イムラヴォは保育料を払いに。  
一方の手にこぼれんばかりの金貨、  
もう片方にはこぼれんばかりの銀貨。

夫人は金の鎖を外しました、  
オディヴィアがくれた結婚の贈り物、 210  
それを子の首にかけ、  
母の形見に着けておくよう言いました。

「息子を連れに来た、  
さようなら、おまえは人妻だから。」  
「金の指輪で私はあなたと結婚し 215  
一生あなたのそばにいます。」

「夫人よ、私が望んだときおまえにその気がなく、  
今おまえが乗り気なとき私が拒む。  
おまえが失ったあの日は決して取り戻せない。  
遅すぎる、後悔先に立たず。」 220

夫人はひとり寂しく暮らし、  
たびたび海を眺めるのです、  
なお初恋の人に会えると期待しながら、  
あり得ないと思いつつ。

#### IV

ついにオディヴィアが帰還 225  
戦利品をたくさん携え、  
彼と夫人と家臣たちは  
盛大な宴を何日も催しました。

男たちは歌い踊り、土産話に花を咲かせ、  
座り込んで飲んで食べて 230  
大きな肉の塊と何本もの泡立つ大樽や  
血の色の赤ワインを大きな角杯で何杯も。

ある日オディヴィアが家臣たちに言いました  
「こんなふうには遊んでばかりもいられない  
われらはバターボール<sup>7</sup>のように太り 235  
食べ過ぎ飲み過ぎで死んでしまう。」

「もうじゅうぶん楽しんだ、  
これ以上はうんざりだ。」

---

<sup>7</sup> Butterball = A plump bird, especially a turkey or bufflehead

海辺でカワウソ狩りをしよう  
夜明けとともに始めよう。」 240

一行は岸辺でカワウソ狩り、  
一頭のセルキーが大岩の割れ目から出てくると、  
オディヴィアは間髪入れず  
見事な一撃で倒しました。

すると家臣の一人が大声を張り上げた 245  
「遠くまで航海し多くを目にしてきたが、  
セルキーに金の首輪とは、  
お目にかかったことがない。」

家臣たちがセルキーを館へ運ぶも  
オディヴィアはひと言も発さず。 250  
ただ血相を変え目を閉じていました  
ののしりも毒づきもなく。

「さあ 出てきなさい、出てくるのだ！ オディヴィア夫人、  
出てきてこの不思議な獲物を見るのだ。  
この生き物の謎<sup>8</sup>を解き明かしてくれ 255  
今まで称えたすべての聖人にかけて！」

夫人が見に下りてくると、  
皆は大騒ぎ。  
「これはおまえにくれてやった金の鎖だ。  
話してみよ、妻よ、この理由を？」 260

「ああ、ああ！ 私の可愛い坊や。  
わが子よ！ どうしてこんなことに？  
その手に私の呪いを  
こんなむごい仕打ちをしたあなたの手に！」

夫人は髪をかきむしり 265  
見るも痛ましい光景、  
息絶えたセルキーをいだし、  
声高に悲しみむせび泣く姿は。

「おまえの子供か、妻よ！ わが子ではない、  
俺と結婚した妻でありながら。 270  
思いたくないが、俺の留守中、  
ふしだらな暮らしにふけていたな。」

「私をあなたの妻とおっしゃいますが、  
あなたは私が結婚した夫かしら？  
あなたは私に寂しい想いをさせ 275  
海の向こうで何年も暮らしたわ。」

「俺はお前に領地と財宝を託し、  
すべての女主人とした、

<sup>8</sup> Riddle-rae rae=rare

- 従順な妻と信じていたからだ  
遠征中俺がおまえにそうであったように。」 280
- 「あなたの領地と財宝など何の値打ちが！  
あなたには女の心は分からない、  
財産を贈ることは  
愛する夫の使命です。」
- 「勇敢な行為を為すべき時に 285  
不名誉なことになっていたのであろう  
もしもお前を愛おしんで館に留まり  
現を抜かす生活をしていたなら。
- 「俺は退屈な暮らしに耐えられなかった、  
だが、よいか、言うておくが 290  
お前を妻にしたとき  
雄鶏の後をうるさく追い回す雌鶏を望んだのではない。」
- 「私が雌鶏なら、あなたは雄鶏  
女たちの尻を追いかけ、 295  
美しい娘と見れば  
言葉巧みに口説いた自慢話を聞きたいわ。
- 「ああ、息絶えた、私の独り子！  
この仕打ちが私の非にあったなら、  
あなたにどれほど多くの赤子がいるかしら  
どれほど私に誠実だったの？ 300
- 「うんざりする長い独り暮らしを慰めるために  
訪ねてくれた人を断れますか？  
あなたがかくも愛する妻という持参金を  
気ままに浪費<sup>9</sup>しているあいだ」
- 「この嘘つきめ、大嘘つきでふしだらな女！ 305  
杯を重ねるときは、必ず  
器量よしのお前に祝杯を挙げ、  
俺に物申す輩と喧嘩した。
- 「非常に困難な戦いのとき、  
疲れ果てたときの気持ちの支えであった 310  
愛する妻に想いを馳せー  
おまえの不義なぞ思いもよらず。
- 「おまえはセルキー族と通じたのだ！  
出ていけ、ふしだらな奴、いますぐに！  
おまえを妻になぞしやしない 315  
たとえキリスト教徒の金貨をすべて手にしても！」
- 夫人はセルキーの首から鎖をひったくり  
オディヴィアの脳天に激しく打ちつけました。  
「出て行って、あなたこそ、口汚い卑怯者。  
別れのしるしにそれを持ってお行きなさい！」 320

<sup>9</sup> While thu skalan frank and free → Ye left me tae a lanely life(st.275)を参照

家臣たちは夫人を穴や隙間から微かな光さえ差し込まない  
高い高い塔に閉じ込めました。  
そして食事と水を運ぶや、  
素早く鉄の扉を閉じたのです。

V

裁判所は夫人に恐ろしい判決を下しました、  
罪と恥すべき行為により、  
火あぶりの刑に処すと  
慈悲も、救済もなく。 325

「ああ、ああ、何と嘆かわしい日！  
ああ！ どうしてこんな目に？  
赤く燃え盛る炎の餌食にならないといけないとは！  
ああなんと惨めで悲しいこと。 330

「ああ父が生きていたら  
私のため断固として戦ってくれたでしょうに。  
亡き母の幽霊が出てきて  
哀れな娘を救いだしてくれないの？ 335

「母親の温かい胸元で  
可愛い赤ん坊を慈しんでいたとき、  
あなたは思いもしなかったでしょう  
愛し子が灰の中の燃えかすになるなんて！」 340

そのときサン・イムラヴォが現れ  
大きな力強い声を響かせました—  
「セルキー族の諸君、ノルウェーに  
北海のすべてのクジラを呼び寄せてくれ！」

美しい夫人の激しい苦痛が伴う  
火あぶりの刑の前日  
<sup>やかた</sup>館の近くで叫び声、  
「クジラだ、クジラだ、湾や入江にも！」 345

オディヴィアと家臣は  
声の方へ大慌てで走り出し、  
喚き、怒鳴り、叫んだり。  
死者を呼び起こすほどの騒々しさでした。 350

男たちは一日中船を駆って波をかぶり  
奮闘するものの一頭のクジラも獲れず  
陽が落ちるころ島に引き返しました。  
手のひらは痛み骨はきしみ。 355

<sup>やかた</sup>館に戻ってくると  
一行は啞然、ものの見事に、  
どの扉も開け放たれ、  
塔の扉は床に投げ出されていたのです。 360

男たちは上を下への大騒ぎ、  
目を凝らし辺りを隈なく探しました。  
美しい夫人の姿は跡形もなく

二度と人間の目に触れないのでした。

オディヴィアは孤独に沈み 365  
身の不運<sup>かこ</sup>を託つばかり。  
いつまでもひどく悔いているのです  
オーディン神に誓いを立てたその日を。

私たちは吟遊詩人たちに感謝し、  
吟遊詩人たちに乾杯します。 370  
私たちの宴は藁<sup>わら</sup>しべ一本の価値もありません  
彼らの素晴らしい歌とバラッドがないならば。

(入江和子訳)